



カンシ



ゴウヨク



ウソツギ



ユウワク

## 愛か死か！家族の絆、殺処分についてのお話。

---

大崎夫妻はお昼の煮魚定食を食べ終え、デパートのペットショップの前、ショーケース前で佇んでいた。

透明なガラスケースの中には、生後、間もないダックスフントが寝そべっていて、布でできた小さなボールで遊んでいた。

ほかには鼻のつぶれたフレンチ・ブルドッグ。  
きれいに毛を刈りそろえられたヨークシャー・テリア。  
銀塩の体毛を持つ、プードル。  
頭にピンク色したリボンをつけたメスのシーズー。  
コリコリをむしゃむしゃ食べているチワワ。

白い体で左目の周りだけが黒いブルテリアがそれぞれ、ショウケースに入れられ、時間をもてあましていくかのような目で通り過ぎる買物客を眺めていた。

白いマルチーズは眠っていて、大崎夫妻の問いかけにも応じないほど、熟睡していた。

その中に1匹。  
見るからに人なつこそうなダックスフントがいた。

「あっ、かわいい。こっちを見てる」  
祥子が言い、鼻の顔をまじまじと、のぞき込んだ。

大きな愛らしい瞳で祥子の瞳を見つめるダックスは、元気もりもりで寝転がり、まだら模様の、ちょいポチャな腹を横にして、シートの上で遊んでいた。

「飼いたいな～」  
祥子がもう一度、鼻の瞳をのぞき込む。

「うちにはポチがいるだろ」  
鼻が、すかさず駄目出しをする。

祥子は老犬のポチを頭に思い浮かべ、  
「ポチか。私、ポチきらい」  
何やらひとり言を言った。

隣町の川原で拾ってきた、老犬、ポチは、うちに来て既に15年経過していた。見るからに老いぼれていて、人間でいえば70歳くらいか。雑種で、人間の問いかけにも応じないほど、耳も目も、既に、もうろくしていた。

「ねえ、あのダックスフント、飼おうよ。さっきからじっと私の目を見てる。なんか運命、感じるな」

祥子は言い出したら聞かない性格をしている。

大崎夫妻は結婚して20年を迎えた。

結婚記念日に、犬を買おうというのが、祥子の提案だった。

2人に子供はいなかった。

「ポチの弟か。悪くないけど。犬、2匹もいらんじゃね」

昇はショーケースに貼られたプレートの情報から、ダックスフントがオスで、産まれて2ヶ月であることを知った。愛くるしい眼差しで祥子を見つめるので、祥子は既に、メロメロだった。

「私、ポチきらい。なんかちっともなつかないもの。飼うなら小型犬がいいって前から決めてたんだ」

「そんなこと言って、ポチどうするんだよ。老犬だぜ」

祥子の言いたいことが昇には飲み込めなかった。

「ポチが死ぬまで飼っちゃいけないっていうの？ それまで大好きなダックスフントを飼えないなんて生き地獄だわ。こっちが、おばあさんになって、2度と動物を飼うことができなくなってしまう。いい考えを思いついた。どこかにポチを放してあげない？ 犬も死ぬ間際くらい自由を味わいたいんじゃないかしら。いつも鎖につながれて自由を奪われる生活なんて、かえって残酷じゃないかしら」

その日はそれで終わった。

翌週、昇と祥子は、懲りもせず、またペットショップのショーウィンドウを眺めに行った。隣にいたコーギーは販売予約の札がついていて、お目当てのダックスフントは相変わらず布製のボールに、じゃれて遊んでいた。

「このままじゃ、マー君、売れちゃう。どうしたらいいの？」

「マー君って誰？」

昇が祥子に問いかける。

祥子は小型犬ダックスフントに既に名前をつけていて、飼う気まんまんだった。

「ポチはさあ、山に放してあげようよ。それがさあ、一番幸せだと思うよ。鎖につながれて自由を奪われて。こんなの幸せとは言えないんじゃないかしら？」

昇も、それもそうだな、と半分納得して祥子の次の言葉を待った。

「で、どうしたいの？ うちにはお金もないし...」

昇は正直な感想を述べ、それで会話を終わらせようとした。

「残念だな。ペットを買うお金がないもの。こればかりは...」

わっはっは～。昇がわざらとしく声に出して笑い、少し意地悪な笑みを浮かべた。祥子には、それが挑発に思えた。祥子が表情を緩めた。

「何を言っているのよ。こういうときのために、私のへそくりがあるんじゃないの。それを使わせてもらうわ。それなら、いいでしょ？ これならみんなハッピーになれる」

祥子はぺろっと舌を出し、来週買いに来て、もしマー君が売れていなかったら、マー君を飼うつもりでいた。あとは売れないことを願うばかりだった。

1日過ぎ、3日過ぎ、祥子は毎日のように夕方、買い物ついでにマー君を眺めに行った。マー君は終始退屈していて、布製のボールにも飽きたのか、寝てばかりいた。

4日過ぎ。

1週間が過ぎ。

とうとう約束の日が訪れた。

大崎夫妻はデパートを訪れ、ようやく念願のダックスフントを手に入れた。狂犬病の予防接種をしてから犬を昇夫妻に引き渡すため、受取りは3日後となった。

祥子がレジで8万円をブリーダーに支払い、マー君は晴れて大崎家の一員となった。物語はここからが始まりだ。ポチの苦難が幕を開けた。

ポチは、とうとう用済みとなってしまい、3日後、丹沢のふもとに捨てられることに決まった。今まで食べたことのないようなステーキが3日3晩、ふるまわれ、牛乳が毎日、大きな皿に与えられた。

ポチは異変を感じ取ったのか珍しく祥子に、なつく仕草を見せ、祥子の体にすりより、ふだん

舐めたりしないのに祥子の頬を舌でなめようとした。そのたびに、イヤな顔をされて、邪険にされるポチ。

「汚いわね。あっち行って」

時、既に遅かった。

祥子の心はすでにマー君に傾いていて、ポチに、付け入る隙など、あろうはずがなかった。

「誰か拾ってくれるわよ。心配いらなくて。かわいそうだと言って、誰かがポチを拾ってくれるわよ。親切な人がきっと現れるわ」

祥子は、いやがるポチを無理矢理、車の後部座席に乗せ、自宅から80キロ離れた丹沢に向かった。

車は1時間かけて東名高速を走り、それから2時間、市道、山道をただひたすら、くねくねと西へ走り、やがて丹沢のふもとに辿り着いた。

時刻は夕方を回っていた。

車を小さな駐車スペースに停めた。

「ポチ、おりなさい。今、エサをあげるからね。疲れたでしょ」

鳥肉、豚肉を油で炒めた肉料理を皿の上に、これでもかというくらい盛りつけた祥子は、改めてポチの顔に見入った。

今まで見たこともないようなごちそうに、ポチは舌鼓を打ち、餌に、がつつく。

何も知らないポチが、エサに食らいつく、そのすきに、2人は、その場を離れる寸断だった。何も知らず、餌をむさぼるように食べるポチ。

「さあ、行こう。ポチが我に返ったら行きずらくなる。行くなら今だ」

昇が祥子の背中に声をかけ、先に車に乗り込んだ。

祥子も、さすがにかわいそうに思ったのか、

「捨てるのやめる？」

昇に言った。

「今更、無理だよ」

昇が運転席のドアから顔を覗かせ、ゆっくりと車から降り、ポチの頭を数回なでようとした。これが今生の別れだ。おまえの顔を見る最後になる。

「今までありがとう。元気に暮らすんだぞ」

「元気でね、ポチ」

こうして別れの時、運命の瞬間が訪れた。

ポチは相変わらずエサをむさぼり食らっていて、自分の置かれている状況を飲み込めずにいた。

。

「これだけあれば3日は生きられる。悲しいけど、これも宿命だ。オレ達を恨まないでくれよ」

再び、車に乗り込む昇。

祥子が続き、2人は車の内部から、外部を見下ろした。

窓を開け、ポチを見おろす祥子。

ポチを見たのは、これが最後だった。

ポチは山盛りの肉を5分で平らげ、食べ終えたときには、一人ぼっちだった。

隣に盛られた山盛りのドッグフードに口をつけたとき、ポチはふと我に返り、昇と祥子がいないことに気付いた。

何かいやな予感がして辺りを見回したものの辺りは既に薄暗く、他に誰もいなかった。30分待った。そして1時間が過ぎた。

昇と祥子が戻ってくるものだとばかりに思って、ポチは3時間を同じ場所で過ごした。その場にしゃがみ込み6時間待ったとき、自分が捨てられたことに初めて気付いた。

ポチは山に向かって何度も遠吠えを繰り返したが、周りからの反応は何もなかった。静かな闇が、ポチを包む。辺りは、淡泊なほど何もなく、深く茂った木々が静寂を保った。

その場で朝まで過ごしたポチは、翌朝、別の皿に盛られたドッグフードでお腹を満たし、とぼとぼと東へ向けて歩き出した。

朝日が昇る方角を目指し、とにかく歩くことにした。

長距離を歩いたことがないポチは、すぐに肉球から出血し、それでも前を向いて、とぼとぼと歩いた。

歩くことをやめるわけにはいかなかった。

進路を東に東に、ただ思いつくまま、気の向くまま東へと進んだ。

1日が過ぎ、2日目には雨が降り、とうとう3日が過ぎてしまった。

ごはんは3日もありつけず、途中道ばたで見つけた犬のふんを食べて空腹をまぎらわせたものの、大柄なポチには空腹が堪えた。

雑草でお腹を満たし、道路脇の水たまりの、茶色く濁った薄汚れた水を飲み、夜も昼も忘れて、ただひたすら東に向かって歩いた。

犬の第六感で、こっちに歩けば昇の家に辿り着けるような予感がして、ただひたすら歩くことにした。

自分を捨てた理由を聞くまでは、死んでも死にきれない。  
昇に、もう一度、逢いたい。

祥子の目を見て、自分を捨てた理由を尋ねたい。  
心が、はやって仕方なかった。

1週間後、ポチは熱でうなされ、神社の境内にうずくまっていた。  
栄養失調と水分不足からくる脱水症状で、熱は平熱を5度も上回った。  
偶然ポチを見かけた近所の人から鳥の骨を持ってきてくれて、ポチは、がつがつとそれを食べた。

世の中には親切な人もいるものだ。もしかしたら自分を飼ってくれるのではないか。淡い期待は夢に終わった。

こんなに薄汚れた老犬なんて、誰も見向きもしないだろう。  
そこにあるのは愛ではなく、情だ。  
くたびれた犬への、わずかばかりの、お情けなのである。

こんな老犬を飼ってもいいというほど、人は気持ちが優しくない。  
ポチは、そのことにまだ気づけずにいた。

ポチは、ようやく元気を取り戻し、神社を出て旅を続けた。  
目指すは大崎夫妻の家だ。

みんなでもた仲良く暮らしたい。  
もう一度、昇の腕に抱かれない。  
思えば思うほど、老犬のポチには空腹がこたえて、ひもじさを募らせた。

どうして自分を見ず知らずの土地に置き去りにしたのだろう。

もしかしたら自分を車に乗せるのを忘れて、車を発車させたんじゃないか？

ドジな祥子のことだ。

十分、ありえる話だと思った。

ポチは理由を探ろうとしたが、考えれば考えるほど、何やら楽しい思い出ばかりが脳裏をよぎって涙がこぼれた。

昇が自分を捨てるわけがないじゃないか。

あんなに毎日、一緒に散歩をしてくれたのに。

毎日、ごちそうを食べさせてくれたのに。

それなのに……それなのに。

なぜ？

何かの思い違いだと言って欲しかった。

単なる勘違いだと、笑ってほしかった。

15年来の家族なのに、姥捨て山みたいに自分を捨てることなんてありえるのだろうか？

自問自答してみたけれど、やはり答えには辿り着けなかった。

足早に2週間が過ぎた。

畑が広がる集落に入り、ポチは危うくお百姓さんに鍬で殴られそうになった。エサをもらおうと近寄ったポチを見て、自分が襲われると勘違いした農家の長男は、ポチの頭めがけ、黒光りする鍬を思い切り振りおろした。

「しっ。あっちいけ。しっしっ」

泥で汚れた体は、いつしか、ばさばさの毛づやで、見るからに野犬の風貌をしていた。

その頃には栄養失調から皮膚病にかかり、体の至る所から毛が抜け落ち、体調も最悪だった。

ポチは首輪をしていたので野犬狩りにあうことはなかったけれど、相当ひどい身なりをしていたと思う。

栄養失調。



脱水症状。

どこに行けば食べ物がもらえるのかもわからず、ただ歩くだけの日々。目は、くぼみ、体からは異臭が発し、いつしか歩くのも困難になっていた。

朝、散歩ですれ違う犬たちはみな幸せそうで、人に飼われることがいかに満たされていて平和なことか、ポチにもようやくわかり始めた。

今までの自分は自由でないことをいつも嘆いていた。

鎖につながれ。

そしていつか鎖から解き放たれ、自由になりたい。

そればかり願い、そして思いは現実になった。

もう少し祥子に、なつけばよかった。

もっと尻尾を振って、喜びを表現すればよかった。

そう思ったけれど、あとの祭りだった。

ポチは、ようやく念願の自由を手に入れた。

でもそれは自由なんかじゃなかった。

苦悩の始まりだった。

飼い主から愛され、食べ物を与えられ、好きなだけ眠ることができた、あの生活は、今思えば天国のようなものだった。

寝る場所に不自由することなく……。

食べるものの心配をすることもなく……。

ポチは現状を嘆いた。

自由とは、これほどまでに制約を受けるモノで、不自由だということが身をもって自ずとわかった。

人間の手から離れたい。

犬だけのユートピアで暮らしたい。

そう思い、若かりし頃、何度脱走しようと試みたことか。

実際に手に入れた自由というものは、それはもう残酷なまでに過酷で、すべてが不自由で、エサにありつくことさえ困難を極めた。

ポチは、

「これで終わりか。ここで死んでしまうのか」  
何度もそう思い、動くのをやめ、目を閉じようとした。

けれどもう一度、もう一度だけ、自分を愛してくれた家族と暮らしたい。離ればなれになった理由を知りたい。その思いに強烈に駆り立てられ、死への恐怖を払拭した。

悲痛なる愛犬の叫び、殺処分ゼロへの道は遠く。

---

その頃、大崎夫妻は、ダックスフントの、マー君をお風呂に入れたり、ペットトリマーに連れて行ったりして、マー君を宝物のように扱った。

かわいくてかわいくて仕方なくて、犬をふとんの上で寝かしつけては、座敷犬として家の中で振る舞わせた。

ポチと違って、よく甘い声をだして鳴くマー君は、おねだりするのも、人に甘えるのも、とにかく上手だった。

子犬の成長はめまぐるしい。昨日まで赤ん坊みたいに思えた子犬が、半年もすれば成犬になり、表情も豊かになる。

大崎夫妻は既にポチのことなんて頭になくて、ときどき思い出すものの、完全に過去の人（動物）となっていた。ポチはボロボロの、ぼろ雑巾みたいになって、よたよたと夜の田舎道を歩き、まったくの別世界を生きようとしていた。

街灯もまばらな田舎道は、孤独を感じるのに十分な場所だった。  
森や川原で休み、昼間、明るいうちに距離を稼ぐ。

見ず知らずの人は、そんなポチをみてかわいそうに思ったのか、おにぎりを食べさせてくれたり、水を飲ませてくれた。

3日ぶりのごはん。

肉や魚が食べたいと思ったけれど、贅沢は言えなかった。

食べられるだけ、ましだった。

あるとき、ポチは親切な村の人に出会った。

「おまえ、まだいたのか？ 行くところがないみたいだな。そう思って食べ物を持ってきてやったぞ」

歳が50歳くらいの、にやついた中年は、ポチの前に盛大な、ごちそうの山を広げた。

タマネギと肉の炒め物。にんにくのタレをこれでもかとかけたステーキ。ドライフルーツにビーフジャーキー。なす。銀杏。チョコレート。するめいか。

犬が食べてはいけない物。

NGフードばかりをポチの目の前に並べ、ポチにすすめた。

ポチはもう3日も何も食べていなかったのだから、腹に入れられるだけ、まし。そう判断して、なりふりかまわずそれらを腹にかき込んだ。

そして1時間後、原因不明の食あたりで動けなくなった。  
畑にうずくまるポチ。

動こうにも腰が抜けてしまい、身動きが取れなかった。そうこうしているうちに、土砂降りの雨で、びしょびしょになり、泥の中で死んだようにうずくまった。

ポチはその場所で2日を過ごした。  
泥まみれになり、雨水に濡れ、ポチはその場で動けずにいた。  
腸が、よじれるような腹痛で、体を丸め、うずくまり、どうにもこうにも体の節々の痛みで動けなかった。

体重が5キロ落ち、下痢が続き、ポチは今更とはいえ骨と皮ばかりになった。肋骨がすけ、みるからに不健康そうで、病み上がりの病人みたいになった。

そんなポチをみかねたのか、畑の持ち主が犬用のゲージを作ってくれた。親切な人だったが、やはりこの人もポチを飼ってくれるわけではなかった。

「おまえ自分の家を探しているんだろう？ 元の飼い主に会いたいんだろう？ だったらこんなところでうずくまってちゃいかんがな。はよ元気出せ」

ポチは、そこに2週間居候し、元気を取り戻したと同時に、その場を追い出された。そうさ、人間は善なる生き物なんだ。愛にあふれた生き物だ。

オレの飼い主様は、今頃どこで何をしているんだろう？  
オレがいなくて寂しいだろうな。

ポチはこれから自分の身に降りかかる残酷な運命も知らず、心に太陽を思い描いた。さすらいの旅が、また始まろうとしていた。

元気を取り戻したポチは今度は進路を南に取ることにして歩き始めた。  
体の調子もよくて、足並みも軽かった。

5時間も歩くと、むかし車で訪れた、伊勢原市にあるキャンプ場に辿り着いた。

そのキャンプ場は、忘れもしない、昇がポチに鮎を5匹食べさせてくれたワンダホーな場所だった。

ここにいれば、もしかしたら大崎夫妻と再会できるかもしれない。

ポチは淡い期待を胸に抱いた。

キャンプ場は連日連夜、夏休みということもあり、家族連れで賑わった。

バーベキューで食べ切れなかった肉や魚、釣った鮎やニジマス。ヤマメをポチは何度も利用客から食べさせてもらった。

食うに困らない日々が続き、ここで一生暮らすのも悪くないな。

ポチはそんなことを考えるようになっていた。

1ヶ月が足早に過ぎた。

しかしこの地区一帯では野良犬の権力闘争が起きていて、ポチを可愛がってくれた老犬のボス犬が、こちらも群れを追われる羽目になった。その煽りを受けたのが、ポチだった。ポチも群れを追われるようになり、ついで、間髪入れず、人間の手で野犬狩りが行われるようになったのもあり、ポチはその場をあとにした。ポチはキャンプ場を追われた。

酒池肉林のような生活は、いつときだから楽しいのかもしれない。

それが毎日続くとなれば不思議と飽きてしまうから不思議だった。

適度に不自由を感じ、適度に快適さを感じるから、生き物は澆刺とするのかもしれない。天国みたいな生活だったけれど、こんな生活が未来永劫続いたら、きっと犬も痛風になってしまうだろう。

ポチは老体にムチを打ち、またしても、とぼとぼと歩きだした。

それから、やはり食べ物に困る日々が続き、体重は激やせしていた頃に、すぐさま戻った。

1日30キロ歩くものの、かつて見慣れた風景には一向に巡り会えず、それでもポチはひたすら歩いた。歩くことしか、今のポチにはできなかった。

ポチを飼ってもいいという人は一向に現れないばかりか、疲れ切った容姿から拒否反応を示す若者も多かった。

毛が抜け変わる季節を迎えた。

いつしか季節は夏から秋に変わり、木々も色彩を深めた。

鳥が、せわしなく宙で、さえずり、もうじき訪れる冬の準備をしているかのように、ポチの目には映った。

もうじき冬が訪れる。

雪降る冬が訪れれば、寒さで体が思うように動かなくなるだろう。

今歩けるうちに距離を稼ごう。

歩く距離を2倍に増やすことにした。

ポチの現在地は大崎夫妻の家から50キロの距離まで迫っていて、そのまま北東にまっすぐ行けば、かつて知ったる集落が現れるはずだった。

ポチは西に歩き東に歩き、そして南に下り、時には北を目指し、大崎の家に少し近づき、そしてわずかばかり離れ、探り当てそうで、できない場所をぐるぐると彷徨った。

冬が本格的に押し迫る11月の晩、またしても偶然、むかし行ったことのある大型スーパーに辿り着いた。

かつて連れて行ってもらったことのあるその駐車場では、来場者にフランクフルトを振る舞っていて、ポチはおじいさんからフランクフルトを3本食べさせてもらった。

「随分、人なつこい犬だな。どこから来たんだ？ かなり汚れているけど一応首輪してるじゃないか。迷子にでもなったのか？」

ポチは、くんくんと声を出して鳴き、人間の言葉が話せないことを呪った。

ポチがちぎれんばかりに尻尾を振る。

【大崎という、40代の夫婦知りませんか？ 大きなワゴン車に乗っています】

何度もおじいさんに話しかけるけれど、おじいさんは一向に気にも留めず、フランクフルトを焼く手を休めなかった。

「もっと食べたいのか？ でも、もうやれないよ。もっと食べたいなら財布でも拾ってくるんだな。ここ掘れわんわん言うてな。千両箱のありかでもオラに教えてくんな」

おじいさんはポチに言った。

ポチはお腹を満腹にして今来た道を舞い戻ることにした。

右に曲がり左の急傾斜の坂道を上り、いつか見たことがあるような景色に辿り着いた。

富士山が見え、かつて車でいった、割と近場の公園で見た景色と同じ光景が、眼前に広がった。ここから大崎の家まで近いことが、なんとなくではあるけれど、わかった。

1ヶ月が過ぎ、そして12月に入り。

状況は何も変わらず、ただ歩くだけの日々。

放浪の生活にも慣れ、1日のリズムが、掴めるようになった。

よし。

あともう少しだ。

今日もがんばろう。

歩き疲れたポチは、その晩、小さな公園で野宿した。

そして朝を迎えた。

何やら予感めいた感情が胸の奥底から何やら突き上げてきて、心がはやって仕方なかった。

この感情は何だ？

ポチは動物の第六感で、この町を中心とした10キロ四方に何かがあると確信した。

これは予感なんかじゃない。

予言みたいなものだ。

ある確信めいた第六感が、ポチの心を突き動かした。

そうだ。

こうしちゃられない。

びんびん伝わってくる、シグナルをもとに、ポチは再び走り出した。

ポチはとりあえず進路を北に取り、そこでかつて知ったる散歩コースを目のあたりにした。

近い。

それもかなり近い。

心がはやり、今にも昇、祥子に会えることを想い、駆けだした。

たしか、こっちの方角だと思うが思い出せない。

30分走ると、ようやく眼前に郵便局が現れた。

ここから200メートルほど下れば、大崎の家に辿り着けるはずだ。  
息をするのも忘れて、ポチは走った。

そうだ、この町並みだ。この風景だ。  
この壁の色。  
電柱。

そしてとうとう念願の大崎の家。  
かつて自分が住んでいた犬小屋に辿り着いた。

無我夢中だった。  
やった～。やっと辿り着いた。  
大きな溜め息と安堵の気持ち。

犬小屋は既に廃墟となっていたけれど、なかにはあの日のままタオルが数枚敷かれていた。

見慣れた、アヒルのゴム人形……。  
そうだ、この町だ。この匂いだ。  
何もあの日と変わらない。

そうだ、やっとオレは帰ってきたのだ。  
我が家に辿り着いたのだ。

よかった。  
本当によかった。

今日まで生きながらえたのは、このときを迎えるためだったのか。  
誰も使った形跡がない犬小屋を前に、ポチはへたれ込んだ。  
そして、くんくん鳴いて、安堵のため息をもらした。

しばらくして、家の中から小型犬の鳴き声が聞こえた。  
今まで聞いたこともないようなキュートな声で、ポチの知らない犬の鳴き声だった。

ポチは混乱した。  
きっと自分がいなくなって昇も寂しかったんだろう。  
寂しさを紛らすため、新たに犬を飼ったのかもしれない。



ポチは、自分が捨てられることになった原因が、まさかこの犬にあらうとは夢にも思わなかった。

今日は月曜日で、祥子はパートの勤めに出てるはずだった。昇は夕方7時を過ぎなければ帰ってこない。

ポチは、今までの苦勞も忘れ、勝手知ったる犬小屋で眠ることにした。  
うつらうつらしているうちに、やがてあたりは暗くなり、冷え込んできた。  
祥子が帰ってくる時間になり、ポチは犬小屋から出て、祥子の帰りを待った。

自転車を15分こぎ、買い物袋を下げた祥子が、やがて電子機器メーカーの部品工場から帰ってきた。そしてポチを見つけ、腰を抜かしそうになった。

自転車を所定の位置に置く祥子。

「あらやだ、びっくりするわね。ポチじゃないの？ どうしてここがわかったの？ どうしてここにいるのよ？ 本当にポチなの？」

なにやら悲しげな瞳を向けた。

ポチはうれしさと喜びで祥子の足元を何度も飛び回り、そして跳ね回り、素直に感情を表現した。

ポチが喜ばば喜ぶほど、祥子の心は複雑だった。  
幼い子犬のように、はしゃぐポチをみて、祥子は困惑した。

ポチの目を見て祥子は言った。

「ポチ、よく聞いてね。私は、あなたを飼うことができないの。わかるでしょ？ 大人には大人の事情があるのよ。でも1週間だけ時間をあげる。あなたに家族団らんの思い出をあげましょう」

しばらくすると祥子は、いつもの祥子に戻っていて、すき焼き用の牛肉を150グラム、そして好物の冷凍物、肉団子を7つ焼いてくれた。ポチは、がっがつと差し出された祥子の手料理を食べ、失った時間を取り戻そうと必死だった。

これで家族団らん、しかも水入らずで過ごせる。

牛肉でできた肉団子は、レトルトだったけど、ポチの胃袋を満たすには十分だった。

そうこうしているうちに昇が帰ってきた。

車のエンジン音に興奮して、ポチは失禁した。

のどを鳴らすポチ。

かつて聞いた、犬の野太い鳴き声に、昇も興奮して、

「ポチか。本当にポチなのか？ サチ、どうしてポチがここにいるんだ？」

状況が飲み込めず、昇が祥子に何度も尋ねた。しどろもどろになる祥子…。

「そんなの、ポチに聞いてくれる？ 何がなんだか、私にもよくわからないの。家に帰ってきたらポチが犬小屋の前に座っていて……」

昇が何度もポチの頭をなでた。

喜ぶポチ。

その優しさがポチをのちのち苦しめることになる。

優しさは、時に苦しさを生む。

それから新しい家族、ダックスフントのマー君を囲い、家族の団らんが始まった。

ポチは、なんだか複雑な気持ちで、ダックスフントのマー君の鼻の匂いを嗅いだ。自分と比べてまだ若く、仕草も初々しくて、たしかに可愛い、マー君は、誰に対しても屈託がなく、愛嬌があった。

「祥子、どうする？ オレは2度も同じ犬を捨てに山には行けないよ。それでなくてもかわいそすぎる」

ばさばさの毛づや、皮膚病で肌がむき出しになったポチの目を見て、昇が悲しい瞳を向ける。

「そんなこと言って、マー君に病気が移ったらどうするの？ あなた責任持てるの？」

「ポチがここに辿り着くまで、そりゃあもう悲しい日々を過ごしたと思うよ」

その言葉を真っ向から遮り、祥子が反論する。

「そんなこと言って、ポチを飼えるほど、うちは裕福じゃないし。マー君を取るかポチを取るか。この際、はっきりさせましょう」

ボロボロになった老犬とマー君。

結果はおのずと知れていた。

「ポチには1週間だけここで過ごしてもらい、1週間後、ポチを保健所に引き取ってもらい

ましよう」

祥子の答えは決まっていた。

「かつての家族だぞ。おまえ、ポチに死ねっていうのか？」

昇が悲壮感漂う瞳で、祥子を見る。しかし、そんなことくらいで、ひるむ祥子ではない。

「ほかに方法がある？ あるなら教えて。生きていたっていいことが何もないのよ。どこにも行くあてがないなら、せめて、それが優しさってものじゃない？ ポチには1週間間にたくさん思い出をつくってもらいましょう。そして、つらいけど、さよならしましょう」

昇もそれ以上、口にできなかった。

ただならぬ雰囲気、ポチは尻尾を丸め、クンクンと鳴いた。

2人がケンカしていると思ったポチは、まさか自分のことを話しているとは夢にも思わなかった。

上目遣いで2人を見つめるポチ。

こんな夫婦を見るのは、実に久しぶりのことだった。

せっかく帰ってきたというのに、何かの理由で2人がケンカしている。

陰悪な雰囲気の中、ポチの知らないところで話は大きく動こうとしていた。

「おれには無理だよ。今度は保健所に連れて行けというのか」

それでも祥子は頑として考えを曲げなかった。

「もともと懐かない犬だったし。人に可愛がられないペットじゃ、ペットの意味なんてないでしょ？」

悪いのはポチだと言わんばかりに、祥子が言う。

次の日も次の日も、今まで食べたことのないようなごちそうが振る舞われた。いい加減おかしいと感じたポチも、まさか2度も家族から捨てられるとは思わなかった。

しかし悲しいことだが、それは、またしても現実となった。

雨降る12月の、とある日曜日。

ポチはお風呂に入れられ、体を清められてから保健所に連れて行かれた。

そして犬用の50センチ四方のゲージに入れられ、再び自由を奪われた。

そこはかつて知ったる病院のベッドとは少し趣が異なっていて、野犬や捨て犬、くたびれた老犬であふれていた。

泣き虫の犬。

ノイローゼ気味の犬。

統合失調症の犬。

野犬のボス。

吠えたり、くんくんと飼い主を懐かしむ犬が所狭しとゲージに詰め込まれ、クソも味噌も一緒に飼い慣らされた。

食事はドッグフードが少量。

病気で死のうが精神が崩壊しようが、そんなことは知ったこっちゃあなかった。

ポチは最初、何がなんだかわけがわからなかった。

てっきりここが犬用の病院だとばかり思っていて、まさか保健所という、動物たちに恐れられている場所だとは露程にも思わなかった。

ゲージから連れ出される犬が2度と同じ場所に戻ってこないことから、ここが死を宣告された場所だということをポチは遅れて知るのである。

毛並みの悪い、薄汚れた犬ばかりが、来る日も、次の日も明くる日も保健所にやってきた。どこか獣くさい犬ばかりで、満足に食事を与えられていない、ガリガリにやせ細った犬も多かった。

ポチはなぜ自分が大崎夫妻から疎まれ、あろうことか2度も捨てられることになったのか、そればかり考えて過ごした。

自分に悪いところがあるなら教えてほしかった。

改善するから僕を見捨てないでほしい、心からそう思った。

大崎夫妻は、ポチを保健所に預ける際、ポチの頭を数回なで、ポチを抱きしめるそぶりをした。

今になってはそれが悲しくて、胸が張り裂けてしまいそうだった。

ダックスフントのマー君を飼うため、仕方なく僕をお払い箱にしたのか。

そうか。

そういうことだったのか。

ポチには、すべてがわかってしまった。

せめてここで最期を迎えろというのなら、僕は愛されていたという証を胸に抱いたまま最期を迎えたい。ガス室に送られる日がいよいよ明日に迫った。

悲しんでも悔やんでも、不平不満を言ったところで、今まで過ごした日々が何一つ変わらないというのなら、ならばいっそのこと、楽しかった思い出を胸に抱いて死のうじゃないか。

そうか。

自分はこの冬を越せないのか。

ここで最期を迎えるのだな。

色々な思いが頭をよぎった。

何も、どこも悪いところがないというのに、人間の一方的な都合で最後通告され、そしてお役御免となった。

ポチは覚悟を決め眠ることにした。

永遠の眠りに就くとはどういうことなのだろう？

様々な思いが錯綜した。

昨日までの自分が果たして幸せだったのか？

自分は産まれてくるべきではなかったのではないか？

自分を責めることで、何かの糸口をつかもうとした。

自分は愛される資格がなかったのではないか？

生きているだけで、息をしているだけで迷惑な存在だったのか？

今まで大切に育ててくれてありがとう。

たとえ一時でも、僕は幸せだった。

そう思おうとしたが、どこかで納得できない、もう一人の自分がいた。

ポチは翌日、クリスマスを1週間後に控えた朝。

ガス室へと送られた。

「とうとうこの日がきちまったな。それにしてもなんて悲しい目をしていやがる。そんな目でおいらを見つめないでくれ。胸が張り裂けちゃうじゃないか。頼むからオレを恨まないでくれよ。これも仕事なんだ。好きでやってるんじゃないからな」

何も知らない、ただ尻尾を振り続けるポチを保健所の係員が誘導し、ポチは畳2枚分ほどの狭いガス室に閉じ込められた。辺りには死臭が漂っていた。

大型犬、小型犬。

大小様々な犬が小さなガス室に押し込められ、ここから出してくれとばかりに泣き叫ぶ。

それでも懸命に尻尾を振り続けるポチ。

もしかしたら、ここから出してくれるかもしれない。

ポチは淡い期待を胸に最後の望みをつないだ。

ポチが尻尾を振る。

「今更、人間に愛嬌を振りまいたところで、どうにもならないんだ。それにしても人なつこい犬だな。オレを恨むなよ」

係員が最後通告した。

「おまえは捨てられたんだ。飼い主から見放されたんだ。だから明日まで生きる権利がない。おまえは生きていだけで老害だったんだ。迷惑だったんだよ。これも運命だ。受け止めてくれ」

悲しい、けれど、とてもきれいな、澄んだ目をした、係員が言った。

ポチが最後に見た人間の瞳とは、このうえなくきれいな瞳だった。

それだけが、せめてもの救いだった。

入り口の頑丈な鉄の扉が閉められ、犬たちは戸惑いを強めた。

これから何が起きるのか。

何が起ころうとしているのか。

ただならぬ気配が漂った。

きゃんきゃん鳴く子犬。

遠吠えする、ドーベルマン。

係員が静かに時計を見た。

処置する時間まで、あと2分と迫っていた。

犬がガス室に10匹くらい押し込まれ、やがて重く、きしんだ音のする鉄の扉がもう1枚閉じられ、室内は完全に密室となった。

四隅の上の方から、そして下の方から、やがて無色透明な、二酸化炭素のガスが、もくもくと送り込まれ、犬たちは呼吸困難で、もがき苦しんだ。

ぐぎ～。

ぎゃ～。

腹の底から響き渡る怒声が、狭い室内に響き渡った。  
犬たちが一斉に声を上げ、室内に阿鼻叫喚の連鎖が広まった。

ここから出してくれ。

息ができない。

苦しい。

あまりの苦しさに自分の舌を噛み切る犬たち。

口から、だらだらと血を垂れ流し……。

動物の鳴き声は扉が2重に閉められているため、外部には一切漏れなかった。

ガラス張りの、のぞき窓から係員が室内をのぞき込んだ。

毎回感じる、胸が張り裂けてしまうような、どこか息苦しくなるような情景が係員を苦しめた。

苦しい。

水が飲みたい。

頭ががんがんする。

5分経ち、動物たちは、やがて鳴くのをやめ、どさっ。どさっ。

1匹倒れ、2匹倒れ。

透明のガラス窓に視線を向け、係員の行動を見ていたドーベルマンも、やがて地に伏した。もう誰も首をもたげていなかった。

すべての犬が床にふし、足を硬直させ、痙攣を起こしている犬もいた。

口から泡を吹く犬。

大きな口を開け、舌をだらりと下げた犬。

呼吸困難で過呼吸を起こした犬。

白目をむいた犬が所狭しと床に重なる。

アウシュビッツのむごたらしい光景が、犬の世界で再現された。

苦しいのは一瞬のことで、やがて意識を失い、心地よい感覚に襲われるというものの、この光景を見た者は感じるものが強すぎた。体から抜き出た魂が狭い空間をさまよい、天上へと勢いよく浮き上がった。

「もう少しの辛抱だ」

係員は時計を見た。

15分が過ぎた。

9時58分。

何匹、犬を殺しても終わりなく。

次から次へと犬が保健所に送り込まれ、そしてそのたびに機械的に犬は処刑され、ゴミと一緒に、燃えるゴミとして処理された。

ガス室での出来事は一瞬苦しみをとまなうものの、痛みを感じることもなく、やがて静かな時間を取り戻した。

ポチは午前9時58分。

空に高く太陽がのぼっていることも知らず、風を感じることもなく天国へと旅立った。

次、産まれてくるときも、大崎夫妻の子供として産まれたい。

それだけを願い、ポチは天国へと旅立った。

羽根のはえた天使がポチを迎えにきて、天国へと連れて行った。

ポチは離ればなれになった兄弟と、雲の上で再会した。

「ポチよ、おまえは頑張った。もうどこへも行かなくていいんだよ。静かに雲の上で暮らすがいい。ここは楽園だ。もう誰にも気兼ねしなくていいんだよ」

安らかな心の声が遠くから聞こえた。

季節は巡った。



春が訪れ、そして夏が訪れ、やがて秋を迎え、ポチが死んだ冬が巡ってきた。

それでも保健所には相変わらず悲しい目をした犬やネコが連日連夜、飼い主によって運び込まれ保護期限を迎えた。

里親になってくれる人はほんのわずかで、ケージに入れられた犬やネコたちは自分の運命を知ってか知らずか、みなどこか寂しそうだった。

人だからという理由で死を免れ、犬やネコだからという理由で死を受け入れなくてはならない現実がある。

それはある意味、人間社会なので仕方のないことなのかもしれないけれど、彼らにも心があり、感情があることをもっと人間は知るべきだと思う。

ポチの死は無駄ではなかった。

そう言える日が、いつか訪れるのだろうか？

ポチは何を思い、どう死を受け入れたのだろうか？

ポチは多くの疑問を人間社会に投げかけた。

ポチがもし言葉を話せたのなら、何を大崎夫妻に語っただろう。

どんな言葉を残しただろうか？

虎は死んで皮残し、人間死んで名を残す。

ポチは死に、けれど何も残せなかった。

その心は大崎夫妻には遠く届かず、親から愛されなかった子供のように、ポチは最後にユダに裏切られた。

ポチは何を伝えたかったのだろうか？

死にゆく瞳で、何をみつめていたのだろうか。

ポチは幸せだったのだろうか？

愛とは何なのか。

家族とは何であるのか。

ポチが何かを語ろうとする。

現代社会は、それだけでなくとも生きにくい、サバイバルゲームのようなものだ。

【人間は命を奪われないだけ、まだましなんだよ】  
ポチなら、そう言うかもしれない。

ポチは死に、そして人々の記憶から完全に消えた。  
季節は巡り、輪廻は転生する。

ポチはあの日、この世を去った。  
それを知る人はごくわずかしかない。

人々はキリストを想った。  
ポチよ、もう一度、蘇れ。  
たとえ、それが苦難へと続く道であっても……。

すべての生き物が幸福を迎えることは不可能なのだろうか？  
自問してみたものの答えはでなかった。